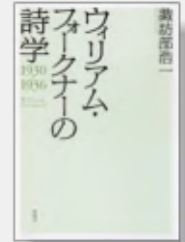


諏訪部浩一 著

『ウィリアム・フォークナーの詩学  
——1930-1936』

フォークナーについての包括的で徹底的に綿密な研究書である。明快で強い批評的解釈に貫かれた本である。

『響きと怒り』と……フォークナーが三〇年代に書いた作品とのあいだには……批評的〈切断〉が見られる」と著者は言う。『響きと怒り』は、「すべてが〈あるべきところ〉にある」秩序ある世界の再構築をモダニスト的に美しく達成した「ロマンス」であるが、それ以後のフォークナーの作品は、常に既に失われているこの秩序ある世界＝「故郷」を、自ら脱構築する強靱な覚悟に貫かれた「小説」である。だから後者は『響きと怒り』におけるモダニスト的達成への自己批評であり、両者のあいだには「切断」がある、というのだ。

秩序ある世界の再構築は、〈他者〉との直面の回避によって達成される。〈他者〉とは、「わからない」者としてそれを排除することによって秩序ある世界が成立する者のことだから、こ

こには循環構造がある。だがそれはまさしく「秩序ある世界」が常に既に失われたものであることの帰結にほかならない。しかも、『響きと怒り』において……キャディを文字通りに作品世界から放逐することによって、その〈植民地化〉を美しく達成した」フォークナーは、一筋縄ではいかないことに、「秩序ある世界」が常に既に失われたものであることをよく知っており、敗北をあらかじめ織り込み済みのロマン主義、いや、あらかじめ織り込まれた敗北があって始めて成立するようなロマン主義、すなわちロマンティック・アイロニーのスタンスを取って作品世界に対し超越的な外部にいる。これは〈他者〉もまた作品世界の外部に排除されているということである。作者もキャディも『響きと怒り』の内部にはいない。そう著者は言う。

さて、「それ以後の作品」においてフォークナーがしたことは、一方でロマンティック・アイロニーのスタンスを取る人々を、そして他方で〈他者〉を、作品世界に取り込むことであった。かくしてフォークナーは「それ以後の作品」において、「ロマンス」的なお話ではなくて、現実の人生に肉薄するポリフォニックな「小説」へと向かったのである。

こうして本書は第一に「小説」成立の機制を語る「詩学」の本である。だが、歴史的な存在としてのフォークナーにとって〈他者〉とは具体的には女性であり黒人であった。それらを作品世界に取り込むことは、それらを〈他者化〉する南部白人イデオロギーを凝視することであった。したがって本書は第二に、ジェンダー研究、イデオロギー研究の成果と手法を自由に援用しながら、「それ以後の作品」を綿密に解釈して著者の「詩学」的な主張に根拠を与えていくこととなる。

ハイタワーやコンプソン氏のようなロマンティック・アイロ

ニーを特徴とする人々が呵責のない視線にさらされ、ジョアナ・バーデンやローザ・コールドフィールドのごとき南部白人イデオロギーから見て「醜い」女性登場人物たちが重要な役割を果たす様子が丹念に検証される。『死の床に横たわりて』の「他者」アディ・バンドレンが小説内に存在することに、また『サンクチュアリ』のオリジナル版と改稿版のあいだに「切断」があることに、モダニスト的完成からの切断と跳躍を論証していく著者の筆致は、「すべての」（と感じられるほど膨大な）先行フォークナー研究からの引用を自在に駆使して息をつかせず、読者を圧倒する。

結果、「醜い」ローザ・コールドフィールドに感動する著者とともに、読者も「醜い」ローザ・コールドフィールドに感動する方法を教えられるのである。それと同時に、『響きと怒り』への自己批判を論ずる本書が、ある意味『響きと怒り』へのこの上ないオマージュとなっているのは、キャディを登場させないでキャディへのオマージュを書いたフォークナーみただなとも感じるのである。（松柏社、2008年10月、四六判500頁、3,800円）

——折島 正司（青山学院大学教授）